

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K00201

研究課題名（和文）日本語話者好みの＜主観的（主客合一的）事態把握＞の研究

研究課題名（英文）Study of Subjective (or Subject-Object Merger Type of) Construal as the Japanese Speaker's Fashion of Speaking

研究代表者

池上 嘉彦 (IKEGAMI, Yoshihiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授

研究者番号：90012327

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「なる」という日本語動詞の生態を一方では古代からそれが経てきた歴史的な時空の中で検討、他方は世界の他の言語における「なる相当動詞」の存在／非存在の確認、存在なら日本語の「なる」の場合といかなる生態上の異同があるかを検討した。得られた知見によると、日本語の動詞「なる」は本来（アルタイ語族のトルコ語、モンゴル語などに似て）＜出現・出来＞と＜移行・推移＞の両面の意味を有していた（従って、ドイツ語のwerdenや古英語のweorþanに似た意味構造の語であった）のが、現在では＜移行・推移＞の意味中心（従ってフランス語のdevenirや英語のbecomeに似た意味構造の語）に変貌したと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の日本語話者にとって、「なる」という動詞はごく身近な存在である。「大きくなる」、「暖かくなる」、「美しくなる」など＜状態の変化＞を表示するのがその基本的な用法と誰もが感じる一方、「結婚することになりました」などと非日本語話者なら＜強制＞と読み取るような場合とか、「こちらがご注文の品になります」といったぎこちない言い回しなど、第三者的な立場で見ると＜奇妙＞としか聞こえないような表現に至るまで、必要以上と思えるような用法も行われている。本研究は、日本語の通時的研究と他の言語の場合との対照により、日本語話者に特徴的な背後の心性を探ろうとするものである。

研究成果の概要（英文）：The Japanese verb 'naru' has been used from the time of the ancient documents down to the present, always with such high frequencies that it may well be regarded as one of the basic words in the vocabulary of Japanese. It does not cease to develop new meanings even today. This research project aims to examine the uses of 'naru' (and its semantically close verbs in other languages) in the contexts of their historical dimensions as well as in the contexts of their crosslinguistic dimensions. We have confirmed that the Japanese 'naru' started with a very similar semantic structure to its equivalents in the Altaic language family (like Mongolian and Turkish), semantically covering both 'emergence' and 'transition' (like 'werden' in German and Old English 'weorþan') but that it has markedly shifted its semantic focus to 'transition' with the result that the verb 'naru' in Japanese now behaves like French 'devenir' and Modern English 'become'.

研究分野：言語学

キーワード：なる ある 日本語 出来（しゅったい） 推移 自発 非動作主

1. 研究開始当初の背景

日本語の動詞「なる」は、万葉・記紀など日本語の最古期の文献から、〈出現〉、〈生成〉、〈成就〉、〈推移〉、〈移行〉などの意味合いで、それなりの頻度をもってその用法が確認できる。その後も敬語的な用法を発達させたほか、現代でも断定を避ける〈婉曲的〉な感じを添える便利な語としてなお新しい用法を生み出すことを止めない。その使用頻度は「いる」と「ある」の間あたりという報告もあり、歴史的に見ても、日本語の基礎語彙の一つであり続けてきたことは間違いない。

2. 研究の目的

本研究は、世界の諸言語にも日本語の「なる」に相当する動詞がどの程度あるのか、そして、存在する場合はそのような動詞の生態は日本語における「なる」の生態とどの程度の類似、ないしは異同、が見られるのかを(それぞれの場合の文化的な伝統に配慮しつつ)確認することを意図している。

3. 研究の方法

諸言語における「なる」相当動詞が存在するか、しないか 存在する場合は、想定されるさまざまな用法について確認する、存在しない場合は、どのような代替表現で対応するかを述べてもらう、こういう形での数十項目にわたる共通アンケートを用意して、インフォーマントにまず答えてもらう。アンケートの回答を検討した上で、研究担当者が対面で回答者に直接必要な点について質問し、返答を得る。調査者は言語学専攻者、インフォーマントは当然、対象言語の母語話者であるが、日本語とバイリンガルの人物(例えば、大学で日本学担当の人物)が見つかる場合は(日本語との微妙な意味のずれにも気づいてもらえるよう)優先的に依頼するという計らいもした。

科研費の執行は、予定の3年間のうち、最初の2年間は順調に進んだ。ところがその3年目、しかもその年度末の3月になって、新型コロナウイルス感染が世界的規模で急速に拡大し、3月初旬に予定し航空便の予約まですませていたインフォーマントとの直接対面によるハンガリー語の調査のための出張を直前にキャンセルせざるを得なくなった。そのため、渡航費として予定していた金額が未消化のまま越年、以後2年にわたる使用期間延長の承諾が得られたものの感染状況の好転は認められず、規定により可能な用途変更を考慮せざるを得なくなった。

その折、以前より共同研究の体制にあった科研費(代表、創価大学守屋三千代教授)の方で、既にかかなりの量の蓄積になっている言語学的研究に、宗教・哲学関係でヘブライ語、ギリシャ語についてなされている(例えば「光アレ」の「アル」の部分に如何なる「ナル相当動詞」を使うかについての)論考も含め、統合した形での研究成果の報告を編著として刊行する計画が立案された。

この計画は数回のZoomによるオンライン研究会を経て、東京都内のひつじ書房より40余名の寄稿からなる書物として刊行されることになったが、これに伴う多数の原稿の書式統一の作業は相当な量の労力を必要とするものであったので、アルバイトを委嘱することにし、その業務に対する謝金として私の科研費残額のほぼ半額を転用することとし、その間私自身が書籍代として転用したものも含めて、科研費(17K00201)の未使用分は消化された。

4. 研究成果

刊行予定の書物は『「ナル的表現」をめぐる通言語的(crosslinguistic)研究 認知言語学と哲学を視野に入れて』と題された四百頁余りの大著で、校正作業を経て本年秋までには刊行の予定である。書物は、第1章「ナル的表現の現在」では、「調査項目の分析」、「ナル的表現とは何か 出来、存在、変化の観点から考える」、「『星の王子さま』から見えること」などの項目、第2章「世界のナル表現」では、日本語(現代語と古語)、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、中国語、サンスクリット語、アラビア語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、チェコ語、ルーマニア語、ハンガリー語、バスク語、英語、など約30言語の共通アンケート調査の結果、第3章「なる的表現の言語学的考察」、そして第4章「なる的表現の哲学的考察」、および「あとがき」という構成になっている。この種の記述、考察としては類書の見当たらない書である。

本研究を通して確認された日本語動詞「なる」の生態に関しての特徴は、それは当初〈出現/出来〉と〈移行・推移〉の両面を備えた意味構造を有していた(そして、その点でアルタイ語族

系の現在のトルコ語、モンゴル語などと類似していた)のが、ごく早い時期に(文献で確認可能な段階で変化が十分に確認できるような状態になるまでに)この並立が後者(<移行>・<推移>)の側面が明らかに優位に立つという状態になり、以後の日本語の歴史では、もともと<出現・出来>から生じた<自発>の意味合いも、多く<移行・推移>という意味合いに吸収されるといった形で現代にまで及んでいる。その結果、現代の日本語動詞「なる」の生態は、古来の状態をなお十分保持してきていると見えるトルコ語、モンゴル語の場合、それからゲルマン祖語からの状態をなおある程度残している現代ドイツ語の werden や古英語の weorþan などよりは、現代フランス語の devenir や現代英語の become などのそれに近いものになっている。背後で日本語動詞「なる」の意味変化のきっかけとなってきたのは如何なる要因であったのか　これはまだ残された興味深い問題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yoshihiko IKEGAMI
2. 発表標題 The Ecology of the Japanese Verb 'naru' in Crosslinguistic Perspective
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 認知言語学 <好まれる言い回し>の背後にある<話者>による<事態把握>
3. 学会等名 東京言語研究所春期講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 <する>と<なる>から見た日本語の受身
3. 学会等名 文法学研究会第8回集中講義（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 「日本語は<悪魔の言語>という言説をめぐって 文化的偏見、言語的相対論、文化の多様性との関連
3. 学会等名 津田塾大学言語文化研究所主催講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 認知言語学—母語話者として<言う>表現と<言わない>表現の間—
3. 学会等名 東京言語研究所春期講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 <視点>から<事態把握>へ—<自己ゼロ化>の言語学と詩学
3. 学会等名 第17回対照言語行動学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 ワークショップ「<ナル表現>をめぐる通言語学的研究—日本とユーラシアの<ナル表現>」での5名の発表に対するコメントと総括
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 池上嘉彦
2. 発表標題 「ナル表現」と中動態をめぐる—中間報告
3. 学会等名 第2回「ナル表現」研究会「ナル表現」をめぐる通言語学的研究
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 池上嘉彦（菅井三実、八木橋宏勇編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 397
3. 書名 「言語横断的に見た日本語動詞「なる」の生態（中間報告）」『認知言語学の未来に向けてー辻幸夫教授退職記念論文集』2-15に収録	

1. 著者名 池上嘉彦（Hiroyuki Miyashita et al.編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Stauffenburg Verlag, Tuebingen	5. 総ページ数 471
3. 書名 'Homology, Homologization, and the Empathy Center - An Essay in Cultural Semiotics' in Form, Struktur und Bedeutung: Festschrift fuer Akio Ogawa, 363-375	

1. 著者名 池上嘉彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 津田塾大学言語文化研究所	5. 総ページ数 123
3. 書名 「日本語は<悪魔の言語>という言葉説をめぐって 文化的偏見、言語的相対論、文化の多様性との関連での考察」（『言語文化研究所報』35, 4-20）	

1. 著者名 池上嘉彦（辻 幸夫他編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 864
3. 書名 「認知言語学と記号論」（『認知言語学大事典』2-18に収録）	

1. 著者名 池上 嘉彦 (池上嘉彦、山梨 正明編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 436
3. 書名 「事態把握」(『認知言語学 11』1-22に収録)	

1. 著者名 池上嘉彦 (米倉 よう子、山本 修、浅井 良策編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 「<証拠性>標識としての『万葉集』における終止形接続の「見ゆ」」(『ことばから心へー認知の深淵: 吉村公宏教授退職記念論文集』2-13に収録)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------